会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

夏に想う

札幌市医師会
小児科西町クリニック
池田（いけだ）　和男（かずお）

７月に生まれたからなのか、小さい頃からの楽しい思い出が初夏のこの時期に特にたくさんあったからなのか、大好物のとうきびやスイカや花火があるからなのか、一年のうちでもこの季節が一番好きです。私の生まれ育った帯広では、「川がり」という町内会の川遊びの行事もありました。三世代で住む自宅の小さな庭での花火も楽しかったのですが、時々小さなやけどをしては、そのたびに祖母から「お便所行って、自分のおしっこをかけてきなさい！」と言われ、そのあとに赤くなったところに摺り下ろしたキュウリで湿布してもらったことも懐かしく思い出されます。そのキュウリ（夏の季語ですね）も嫌いにならずむしろ大好きです。花火は最近では一年中あちこちで上がっているような気もしますが、PCに向かっている今（７月11日夜）もドン・ドンという音が聞こえます。雨の合間に円山と藻岩山の間で花火が上がっているようです。豊平川、真駒内、大倉山、盤渓、モエレ沼などの花火も自宅マンションから見えますが、高層ビルや山に遮られて欠けた花火なのが残念です。花火と言えば、７月４日の米建国250年に合わせた祝賀行事では約85万発が首都ワシントンの夜空に打ち上げられたとのことでした。日本三大花火の秋田大曲１万8,000発、長岡は２日間で２万発、土浦２万発、隅田川でさえ２会場合わせて２万発、帯広の勝舞花火大会が２万発だそうですから、85万発とはどれほどの音や煙だったことでしょう。ワシントンでは周辺の大気汚染が通常の６倍以上、特に打ち上げ開始後には皮膚や気道を刺激するマグネシウム濃度が通常の90倍以上、PM2.5の濃度も急上昇したと報じられていましたので喘息や皮膚炎を発症した人がいなければ、と願うばかりです。米国には七夕のような行事があるかどうかわかりませんが、もし花火の打ち上げが４日でなく７日であったならMILKY　WAYでのベガとアルタイルの年に一度の逢瀬も騒がしくて大変だったことでしょう。PM2.5に関しては、最近の研究では大気汚染物質の中でもとりわけPM2.5への長期的な曝露が川崎病の発症リスクを高めることが日本を含む複数の国で報告されています。小児科医（小児循環器医）として、たくさんの川崎病の患者さんの診療に携わってきましたが、川崎富作先生が初めて報告されてから60年近く経た現在でも原因は完全に解明されてはいません。日本では毎年１万５千人前後のお子さんが川崎病に罹患しており、決して珍しい病気ではありませんが、生来の川崎病にかかりやすい体質を背景に、何らかの原因物質（細菌やウイルス由来）が主に空気によって運ばれる可能性が高い事、発症には体内で生じる「危険関連分子パターン（DAMPｓ）」、特に酸化脂質が重要な役割を果たしていることが分かってきています。これらの川崎病の原因についての新しい知見はCOVID-19の流行によるRSウイルスやロタウイルスなどの特定のウイルス感染の動向（減少）とMIS-C（小児多系統炎症性症候群）という川崎病によく似た病気の世界各地からの報告などから得られています。現役の小児科医でいる間に川崎病の原因が明らかになってほしいと願っています。夏の思い出から、川崎病へと話が飛んでしまいましたが、「会員のひろば」への投稿の機会を頂いたお陰で、懐かしい子供時代の事や大好きだった祖父母のことも思い出させて頂きありがとうございました。